

経営の多角化こそ好機

いよいよ夏も本番。うだるような暑さを避けるように学生と訪れたのは、保冷剤などを製造する三重化学工業（松阪市）。社内もきつとひんやりとしているのかと思いきや……。

（吉川翔大、熊崎未奈）

三重化学工業（松阪市）



最初に案内されたのは、予想に反して熱気が漂う工場。マネキンの手のような物体がつるされ、ぐるぐるとし生産ラインを回っている。ここで作っているのは、業務用手袋で、同社のもう一つの主力商品だ。原料の樹脂を固めるため、熱処理が加えられていた。「保冷剤と手袋って、共



保冷剤の製造現場を見学する藤田さん
（左）いづれも松阪市の三重化学工業で

通点が全然見つからない。なんで同じ会社で？」。見

学に訪れた三重大三年の藤田ひなのさん（左）が首をかしげた。実際に製造に使う保冷剤の製造を始めた一九六六（昭和四十一）年、夏場は大忙しの反面、冬は需要が少なかった。「冬場の仕事はないか」と模索し、手袋にたどり着いた。



機械も別々で、「作り方も売り方も全然違う」と山川大輔社長（右）。理由には季節特有の事情があった。



山川社長と話す藤田さん

創業は洗濯用のりメーカー

三重化学工業 1956年、山川大輔社長の祖父・善高氏が創業。本社は松阪市大口町。洗濯用のりのメーカーとして始まり、保冷剤や作業用手袋なども手掛ける。その後も経営を多角化し、竹由来の糸を使ったアームカバーも開発。2017年には医療分野向け商品の新ブランド「メディアン」を立ち上げた。17年10月期の売り上げは17億4000万円。従業員数は約50人。

内側の生地だけ取り外して洗濯できる機能や、カイロを入れるポケットを作るといったアイデアが人気となり、売り上げを伸ばした。結果、雇用が安定し、防寒手袋では国内トップシェアを誇るようになった。



指にはめて突き指の治療ができたり、アイマスクに装着して目を冷やせたりと、いった医療用から、ネイルサロンで使うジェルの温度を保つための専用用品まで。

次に訪れたのが、同社の看板商品でもある保冷剤の生産ライン。冷房が効いた室内で、キーキの持ち帰り用の小型の物を作っている。『うちの冷凍庫に入っているやつだ』。藤田さんの声が弾んだ。「使っているのは食品添加物。間違っても食べても安全なんですよ」と、生産部の玉置和也さん（左）も、これは序

学生を募集します

ミエシゴト探訪では、取材に参加したい学生を随時募集しています。県内でキラリと輝く企業と一緒に訪問しませんか。興味のある方は、中日新聞三重総局=059(228)2121=にご連絡ください。メールは=mie-s@chunichi.co.jp=へ。

「大手は参入しないニッチ（隙間）な分野。でも、そこでたくさん商品を開発することで売り上げを増やしているんです」と山川社長。近年参入した医療用品は病院からの要望を基に開発するなど、現場の声を聞いて回ること、異業種への挑戦を軌道に乗せた。「経営の多角化はチャンス。新しい事業の種まきは、これからもしていきたい」。三重大などと共同研究も進め、今も隠れたニーズを探している。

藤田ひなのさん（三重大人文学部3年、名古屋市）保冷剤の中身の配合を商品ごとに変えていたのが印象に残った。コスト優先の大量生産ではなく、発注先のニーズに合わせた作り方をしていると感じた。高い技術力がある企業が三重県にもあることを、大学の友人にも伝えたくなくなった。

情報発信にも力を入れている。人材不足もあり、優秀な社員の確保は経営面でも重要なテーマ。山川社長は「中小企業のマイナスポイントは知名度不足」と言い、地元の子どもたちの職場見学も積極的に受け入れる。「小さなころに会社を知ってもらえれば、就職活動で興味を持ってもらえるかもしれない。学生にはいろいろな企業を見てほしいと思うけど、僕ら企業側も歩み寄っていかないといけない」

配合品を商品ごと